



医療最前線 「コナ」との闘い 県立中央病院から

〈211〉

世界的に広がりをみせる新型コロナウイルスの患者を受け入れている山梨県立中央病院。ウイルスの研究と臨床に従事してきた小俣政男理事長に、新型コロナウイルスの特徴のほか、治療、ワクチンの展望について聞いた。

— 新型コロナウイルスの特徴は。「気道」感染、すなわち空気の通り道の鼻から入り、鼻

の粘膜でウイルスが増殖する。「感染者の症状の一つである」匂わない」というのは、ウイルスが鼻の粘膜から入って増えるから。当院でPCRを行った結果、唾液では30%ほど感染を見逃すことが分かった。マスクはしっかりと鼻

ころにもっとも多く、破壊し尽くすころにはほぼ消えている。つまり、病気の初期にウイルスを撃退すれば重症化は防げる。当院では、入院1時間以内にウイルス量を測定器「ルミパルス」で調べ、量が多い高齢患者に抗ウイルス薬

同時流行に備え、多くの役割を地域の医療機関が担うことになったと聞く。当院は、最大限のバックアップ体制を敷く。

— 具体的には。実績を積んだPCR検査（累計1万件以上）に加え、コロナ、インフルを含む21種類のウイルス・細菌を50分で検出でき

小俣政男理事長に聞く マスクしつかり、換気も

まで覆い、空気感染と考えて入念な換気も必要だ。

— 治療による重症化予防は。鼻から肺に入ったウイルスは肺の細胞を破壊する。ウイルス量は、肺の破壊が始まる

レムデシビルを現在まで7例投与し、重症化を防いでいる。重症化してからのレムデシビル投与は、ウイルスが減少していて意味がない。

る機器「フィルムアレイ」を稼働させ、高感度で迅速な検査体制を構築した。24時間の発熱外来を介して、かかりつけ医を支えていく。

— ワクチン開発の展望は。37人の患者を3カ月追跡し、極めて活発な抗体産生を全例で確認した。世界で5千万人が感染したが、再感染した事例は数例にとどまっている。これらの結果を踏まえると、ワクチンの開発に期待が持てる。

— 1989年、PCR測定器1号機をつくって以来、ウイルス遺伝子研究に従事してきた。精度管理を含めて、地域の医療機関と連携を深め、感染症指定医療機関としての役割を果たしたい。

インタビューに答える小俣政男理事長
— 甲府・県立中央病院

— 冬到来に向け、コロナ、インフルエンザ対策は。

— 「コロナとの闘い」シリーズは終了します。次回は26日に掲載します。